

## 2024年6月23日 久宝教会 聖霊降臨節第6主日礼拝メッセージ

「種蒔きが先か、刈り入れが先か」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 4章 27-42節

ようやく関西地方も梅雨入りとなり、今日も雨が降っています。今年は梅雨に入るのが遅かったのですが、この6月の間に、この教会・こども園の周りでもすっかり田んぼには水が張られて、田植えがなされ、小さな青い稲がきれいに並んでいます。6月頃に植えられた稲は、暑い夏を越えて、秋10月頃には収穫の時期を迎えます。昔から、毎年繰り返されている営みとはいえ、およそ4カ月で小さかった苗が、大きな稲穂となるというのは、本当に不思議なことです。

「種蒔きが先か、刈り入れが先か」……。田んぼにしても畑にしても、数か月後に作物を収穫することを期待して、種を蒔いたり、苗を植えたりするわけですから、そのことから考えると当然「刈り入れ」よりも「種蒔き」が先です。とはいえ「卵が先か、鶏が先か」ということわざもある通り、「卵が無ければ鶏は無く、鶏が無ければ卵もない」という循環論法にもなっていますから、厳密に言えば「最初に種を蒔くための、種はそもそもどこから来たのか」という疑問にぶつかってしまいます。そうすると、やはり「種蒔き」よりも、「刈り入れ」の方が先にあるのでしょうか。どうでしょうか。

これまで教会や、多くのキリスト教主義の学校や保育園などの関連団体では、キリスト教について伝えることや、教えることを、「種蒔き」と呼んできたのではないかと思います。キリスト教について何も知らない人に、聖書のお話をして興味を持ってもらったり、多くの場合は何となく「あんな話もあったなあ」という具合に、記憶の片隅に置いておいてもらったりすることを「種蒔き」と呼び、それがやがて、ある時にふと思い出されて、「教会に行ってみよう」と思ってもらったり、「昔、こんな話を聞いたことがあります」と言ってもらったりする……。そしてそこから、クリスチャンになっていく。それを「刈り入れ」と呼んで来たのではないかと思います。そのような道筋を想定しながら、いつかどこかで蒔かれた種が発芽して、やがて「刈り入れ」ができる位に立派に実ってほしい、そのためにも今は「種蒔き」が大切なんだ、とこれまで、教会に連なる多くの方々は、「種蒔き伝道」に励んで来られたのではないのでしょうか。ですが、福音書の中でイエス様が言われていることは、どうもそう

ではないようです。

今回の聖書の言葉、「ヨハネによる福音書」4章の35-36節には、「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月ある』と言っているではないか。しかし、私は言っておく。目を上げて畑を見るがよい。すでに色づいて刈り入れを待っている」とあります。「小麦の刈り入れ時期は、4か月後のことです」から、今はまだ忙しくはないですね、と思っていた弟子たちに対して、イエス様は「目を上げて畑を見るがよい。(畑の小麦は)すでに色づいて刈り入れを待っている」言われました。もう既に立派に実って、収穫の時期が来ているよ、というわけです。

37節の言葉「一人が蒔き、一人が刈り入れる」は、直訳すると「一人は種を蒔く者で、他の者が刈り入れる者だ」ですから、意味としては「種を蒔く人と刈り入れる人とは別である」となります。そもそも人々が農作業をしたのは、自分たちが食べるためでした。蒔く人と刈り入れる人が同じだからこそ、汗水を垂らして苦勞する甲斐があるというものだったでしょう。しかし、貨幣経済の発展や、植民地支配の構造の下で、農作業に従事していた人々は、次第に搾取され、貧しくされていき、やがて先祖伝来の土地を奪われ、小作農や日雇い労働者となっていきました。つまり自分たちが苦勞して蒔いた種や、育てた農作物が、他人によって刈り取られ、収穫され、転売されていったのです。この「一人が蒔き、一人が刈り入れる(=蒔く者と刈り入れる者は別である)」(37)という言葉は、「こんなおかしい現実がまかり通っていてよいのか」という搾取された農民たちの嘆きを表したことわざでした(参照:ヨブ31:8、ミカ6:15)。

しかし、ここでイエス様はそのような嘆きのことわざを逆転させて、よい意味で用いられています。「私は、あなたがたを遣わして、あなたがたが自分で勞苦しなかったものを刈り取らせ」(38)る、そして「蒔く人も刈る人も共に喜ぶのである」(36)。つまり、弟子たちが刈り取りを奪われてしまう側ではなく、むしろ刈り取る側であり、しかも蒔く人から搾取するのではなく、蒔く人と共に喜ぶ道が備えられているのだ、ということです。弟子たちが既に白く色づいた小麦を収穫する人々であるならば、その麦の種を蒔いたのは誰でしょうか。それは神様ご自身に他なりません。種を蒔く人は神様ご自身であり、私たちはその豊かな収穫を刈り入れるために、呼び出され、遣わされているのだというわけです。

そもそも、この「ヨハネによる福音書」4章のお話の舞台は、当時のユダヤ社会からは、異邦人・異教徒と見なされ、差別されていたサマリア地方にあるシカルという町でした。「サマリア人とは口をきいてはいけない」「(宗教指導者である)ラビは女性とは話してはいけない」というのが、「普通」であり「常識」とされていた中、イエス様は人目をはばかることなく、自分から井戸に水を汲みに来たサマリア人女性に「水を飲ませて下さい」と声をかけました(4:7)。そして、ユダヤ人たちがエルサレムの神殿こそが唯一の神殿であり、神様を礼拝する真実の場所だと言い、それ以外は認められないと言い、サマリア人たちがそれに対抗してゲリジム山の神殿での礼拝こそが正しいと主張し合っていた中で、イエス様は「まことの礼拝とは、場所の問題ではない」と明確に断言されました。そして、むしろ「霊と真実をもって礼拝すること」こそが大事なんだ(4:23,24)と明確に断言されました。この女性は、イエス様のそのように断言される姿や、言葉と振る舞いに深く感銘を受けて、周りの人々に「この方はメシア(救い主)かもしれない」(29)と言ったのだろうと思います。

「ユダヤ教とサマリア教とどちらが正しい教えなのか」「エルサレムの神殿とゲリジム山の神殿はどちらが正しい神殿なのか」「こちらの種とあちらの種とどちらが正しい種なのか」……。大切なのはそんなことではない。誰が何の種をどこに蒔くかではなく、もうすでに世界中のあらゆる場所に、命の神様によって種は惜しみなく蒔かれている。そして既にそれらは芽生え育ち、実って色づき、収穫・刈り入れを待っている。その事実気付くことができる感性、その事実を認めることの出来る目を私たちは持っているでしょうか。

私たちが「種蒔き」ををすると言う時、言うまでもなく私たちは「種を持っている側」であり、種が蒔かれる相手や場所は「種のない側」になります。それは「持っている側」から「持っていない側」へ、上から下への見下しの行動となってしまいます。また「キリスト教を教える」と言う時、無意識のうちに「理解できる人」と「理解できない人」とを選び分け、「理解できる人」は偉い人、賢い人として評価して、「理解できない人」は残念な人、賢くない人として評価してしまっていないでしょうか。イエス様が言われた「私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げること」(34)とは、宗教としてのキリスト教を教えることではなく、全ての命が

神様によって創られ、豊かに祝福された存在であることを認め、それぞれの命が輝いて生きていけるようにすること。そのためにも、抑圧されたり、押しつぶされたりしないように、守っていくことなのではないかと思います。

日々に様々な事に追われて、心を奪われてしまっている私たちには、一つ一つのことの中に秘められている神様の業、色づいている実りに気付いていないことが多くあります。今一度それらに目と心に向けて、豊かな刈り入れの業へと神様から遣わされて行きたいと願います。